

# パンタナール通信

南北米福地開発協会

会報

2012年4月1日

103号



## 神様の祝福の地、レダ (ノアの洪水後の虹のように)

午後のひと時、雨が上がり陽が差し始めると、東の空に大きな虹がきれいに半円をなして輝きました。神の壮大な創造の技に改めて感動する瞬間です。去年は数カ月にあたる洪水があっただけに、ノアの時を思わず思い出します。今や水の下にあった大地は、豊かな緑に覆われ、万物は新しい生命の誕生を至る所で見ますし、そののどかな姿は私たちの心を癒してくれます。正に天国が現実を感じられます。

日陽園は聖なる地、神の栄光の地です。沢山の人が次々に訪れて来る様になるでしょう。



## 日本とブラジルからの訪問者

三月六日から八日まで、川崎の浦尾さん親子三名と、ブラジル在住の平野さん、松浦さんが、ポルト・ムルチーニョ（ブラジル）からボートでレダを訪れました。6日は、佐野さんがレダ紹介のビデオを見せ、レダの歴史や現状を説明しました。

七日は、中田所長が、敷地内の案内をし、養殖場、豚ランド、農場を見てまわりました。

そして、第六の池の魚を網で取り出す作業を見学して、元気のよいパクーの姿に触れていただきました。その後、乗馬を浦尾さんの息子さん、奥さん、松浦さんが楽しみました。息子さんは初めての体験でしたが、すぐに遠乗りにでかけました。奥さんと、松浦さんは経験があり、久しぶりの乗馬を楽しんでおられました。

午後からはボートで釣りに出かけ、平野さんにはドラドがかかりました。その他の人たちもピラニアをたくさん釣って満足しておられました。

浦尾さんは、色々な情報に詳しく、興味深い話をたくさん聞かせていただきました。

松浦さんは、ジャルジンの学校の学生二五名に奨学金を提供し、地域の復興にも力を注いでいます。平野さんも、ブラジル、ジャルジンの環境整備のため忍耐強く頑張っておられます。（伊達氏より）



ヤギのメエメエも大きくなってきたが、今でも人に懐いていて甘えて来る。（奥地レトロにて）



ハナ子と7匹の子供達（乳を求めて小さな母親にコロコロ太った子犬たちが群がる。3/2撮影）



第二豚ランド建設現場



蓮の花



中には自立して上の豚のように8匹の子豚を連れて野生化しつつある豚もいる。この豚は100kg近く、まるで熊が出て来たかと思わせる迫力があつた。3月初めに格闘の末、捕獲された。





## 牧畜の報告（佐野報告）

今季は川の水位が例年よりはるかに上昇。そこで川沿いでの牧畜をあきらめ、フェリックスが六月上旬に、レダから十数キロ離れた奥地のフィルメと呼ばれる五百haほどの自然牧草地へ牛を移動しました。そこは昨年上山さんが針金を張って囲いを完成してくれていた所でした。前のオーナーがタハマールを作ってくれていたもので水の確保も問題なく、そこにキャンプを張り、放牧しました。問題はジャガーで、それ故、毎日夜には牛を人間のキャンプ地まで集めて保護したそうです。

七月初め私がレダに帰りましたが、十五日からパラグアイの口蹄疫の予防接種期間ということで、そこに牛に注射をする施設を早急に作らなければなりません。そこで業者を連れてきて緊急に（一週間で）施設を作り、SENACSA（国の、牛の管理機関）の職員が来るまでに何とか間に合わせました。

水に囲まれているレダ基地から奥地に行くには、車は使えません。カヌーで行けるところまで行って、それから馬で行くしかありませんでした。しかしどうしても奥地開拓にはトラクターやトラックが必要なので、パブロ氏がドラム缶をつけた、いかだ、で作業車に向こう側に渡すことを提案。（水のある地域では実際行われているとのこと）現在は乾季なので、一旦水のないところに渡れば後は問題ないのです。

そして工夫に工夫を重ねて三日ほどでそのドラム缶を十五個付けた、いかだ、を完成させ、トラクターを渡すことに挑戦しました。労働者を全員動員し二トン以上もあるトラクターをいかだに乗せたまではよかったのですが、水かさが浅くドラム缶が地に着いてしまいました。それを引っ張り出すために人力で

押したりして、最後には馬で引っ張って、ようやく、より深いところまで引っ張り出しました。その後も、いかだ、が不安定で左右に揺れるため、労働者が腰まで水につかって押してゆきました。しかし一キロ近い距離がある上に、途中に浅いところがあつたりして困難を極め、最後には向こう岸から隣人のトラックに引っ張ってもらって、二日がかりでようやく渡すことに成功しました。その後、私のトラック、トラクターに付ける草刈り機、トレーラーも渡し、今は現地でフル回転で仕事をしています。トラックでキャンプ地まで行く道も作りました。

現在は、さらに五キロ行ったところに七百ヘクタールほどのハラクエと呼ばれる自然牧草地帯があり、そこに牛を移動しました。そこも以前のオーナーが牛を飼っていた所で水を貯めるタハマールがあり、アランプレ（柵）で囲われています。そこで現在三人の請負業者を入れてアランプレの修理をしています。

また さらに数キロ行ったところにもっと広いポートレリトと呼ばれる牧草地が広がっております。そこも以前のオーナーが使っていた所でタハマールも作られてあります。レダの奥地には無限の可能性があるので、現在そこにも業者を入れてアランプレを張るように手配しています。

一、ハラクエにおけるアランプレの囲いの完成（二―三か月程度）

二、ポートレリトにおける

アランプレ囲いの完成（二―三か月）

三、フィルメを含めてすべての

牧草地における水飲み場の整備

四、各牧草地における牧童小屋の建設

五、水につからない道路の建設

（レダからハラクエまで十数キロ）

六、人工牧草地の開墾



yam芋 (大きくなると60kgにも)



宮古島の東京農業大学宮古亜熱帯農場でyamイモの栽培と育種の研究をしている豊原秀和同大学副学長 (昨年の夏)



レダで収穫されたyam芋



レダのyam芋の畑

東京農大豊原教授から頂いたyam芋をレダの地に実験的に植えました。『二〇〇九年に横植えで行い、数本の芽が出たか、暫くしてすべて枯れてしまった。残りの種イモをポットに入れておいたところ、一本だけ芽が出てきて成長したので花壇の端に植えたところ成長が著しく長く蔓を伸ばした。最初のyamイモの収穫は翌年七月二三日で予想以上に大きくなっていた。十キロほど取れたので、それを種イモとして十七個ほど、五十cmの深さに掘って腐葉土をいれた畑に植えた。寒気の為、九月後半に入って芽が出てきて成長し始めた。柱を立てて蔓を伸ばしやすくしたので、どんどん上に成長した。(伊達氏報告)

東京農業大学、豊原副学長を二月二十九日訪問し、豊原教授が二〇年前より、人類の飢餓問題解決の道を拓くため研究し、実践している内容を研究室にて当協会会員の山岡氏、大滝氏とともに聞く機会を持ちました。

『豊原副学長はこのイモを宮古に普及させて菓子やパン、麺類などの特産品に加工する地域付加価値向上型の産業創出を描いている。宮古島農場では、世界中から集めたyamイモの八〇品種を試験栽培している。新品种は品種間の交配やエックス線照射などをして育てたイモの中から選抜したという。』

イモの形は塊状で、機械収穫に向く。十ヶ当たりの生産量は、五ヶを目指す。一個の重さは一―二kg。三月に植え付けて、十一月ごろから収穫する。生活習慣病の防止に有効とされるポリフェノールやアミノ酸、ミネラルなどの含有率が高い。宮古島での研究は二〇〇四年から進めている。yamイモを普及したい作物に選んだ理由には①昔からなじみがある②台風に耐えられる―なども挙げた。』

二〇一二年八月の新聞より

南北米福地開発協会 事務局  
〒二一三〇〇〇一  
神奈川県川崎市高津区  
溝口三十一番十五  
岩崎ビル四F  
電話 〇四四一八二九一二八二二  
Fax 八二九一二八二二〇  
会費納入 郵便口座  
一〇一八〇一七七六八〇四七一  
Eメール office@asd-nsa.jp  
ホームページ http://www.asd-nsa.jp

南北米福地開発協会  
会員募集中  
地球家族として  
自然を守りましょう

南米、パラグアイ、パンタナール地域へのエコツアーならびに植林活動を通じて生態系の維持と強化を促進し、その地域をモデルとし、世界に環境保護の大切さを訴えています。

会費は月五〇〇円、毎月、パンタナール通信を送ります。また、各種のセミナー、エコツアー等の案内をいたします。